

キャリア教育の潮流

キャリア教育に取り組む先生方や教育関係者の実践を、ライターとして見聞きしてきました。その中で感じた、これまでのキャリア教育の潮流を紹介いたします。頭の中の整理に少しでもお役に立てばうれしいです。

フリーライター

松井 大助

まつい・だいすけ
1976年生まれ。編集プロダクション勤務を経て独立。ライターとして「働くこと」「学ぶこと」の二つのテーマを追いかける。著書に「5教科が仕事につながる」「会社のしごと」シリーズ（ベリかん社）など。

呼び名に縛られない議論を

「キャリア教育」という言葉についてまず確認すると、その目指すところは「進路指導」とほぼ同じなのだそう。文部科学省のホームページに掲載されている中学校・高校の「キャリア教育の手引き」には、中央教育審議会答申のそんな見解が引用されています。

では、なぜキャリア教育と呼ぶのかといえば、「進路指導」だと進学・就職の「出口指導」の印象が強くなるという事情がありま

す。だからキャリア教育を掲げたものの、「職業教育」と混同されるなど、共通認識はなかなか形成されません。

こうしたすれ違いを理解する上で、「キャリア教育の手引き」は大変参考になるので、ぜひご覧になっていただきたいですが、一方で私自身思うことがあります。誤解を恐れずに言えば、この際、キャリア教育と呼ぼうが呼ぶまいがどちらでもいいので、「いまの子たちに必要な教育は何か」という本質を、学校内外の人で議論に議論を重ねれば、そこで見いだされたものが結果的にキャリア教育に

なるのではないか、という思いです。

ライターとして、キャリア教育の専門誌にも携わってきましたが、その誌面でキャリア教育の事例として紹介した先生の中には、実は自分の活動を別段キャリア教育と思っていない先生も結構いらっしゃいました。ただし、そうした先生方には共通点がありました。「子どもたちが社会に出たときにどうなっているのか、そのために自分には何ができるのか」を繰り返し自問自答し、ほかの人とも積極的に意見を交わしていたことです。

ですので、本稿もそんな「社会に送り出す

ことを意識した教育」全般についてお話しさせていただきます。

生き方と生きる力

社会に送り出すことを意識して、先生方が生徒たちに働き掛けるとき、そのやり方は二通りあると私は感じています。

一つは、「生き方」にふれさせること。

もう一つは、「生きる力」を育むことです。

キャリア教育の必要性が叫ばれた初期のころ、多くの先生方は特に「生き方」にふれさせることを意識していたように思います。ニートやフリーターの増加、若年層の早期離職率の高さが社会問題化し、生きる上で働くことの意義を子どもたちに見つめさせたい、という機運が高まったからです。

また、阪神・淡路大震災を経て、助け合うことの大切さが再認識され、その半面、少女による殺傷事件の報道が相次ぎ、人のつながりや命の尊さを子どもたちに感じてほしい、という思いが強まった時期でもありました。こうした意図が絡み合う中で広まったのが、職業人講話や、地域で取り組む職場体験

でした。

最近では、これに加えて「生きる力」を育むことへの注目度も高まっているのを強く感じます。背景には、社会の急激な変化に伴い、従来の学校教育のままで、この先の社会で求められる力を十分につけられるのか、と懸念する先生が増えたことがあると思われます。例えば、情報社会と言われ、知識は先達から受け継ぐだけでなく、必要な知識（情報）を自分たちで日進月歩で生み出すことも必要になった現代において、ともすれば生徒が自分で考えず、先生から教わるだけになる講義形式の授業を続けていいのか思い悩む、といった具合に。

アクティブラーニングや協働学習など、ものごとを学ばせるだけでなく、その活動を通して、自分で学ぶ力や、人と関わる力も高めようとする実践が増えました。国内外で、これからの社会に必要なスキルを整理してまとめる動きも活発化し、「21世紀型スキル」「社会人基礎力」「ジェネリックスキル」「基礎的・汎用的能力」といった語句も広まりました。そうして「生きる力」に熱い視線が注がれるようになった裏側には、「生き方」にふれ

させる学校の取り組みが一過性のイベントで終わることも少なくなく、生徒の学習意欲の向上などに結びついていないのではないかと、という反省もあつたように思います。

多様性もキーワード

けれども、子どもたちを「生き方」にふれさせることは、これからの社会に出る上で、いっそう大切になる、と私は思っています。

さまざまな生き方にふれる中で、子どもたちは「好き」や「憧れ」を見つけます。価値観の形成であり、どんな生き方がいいか紋切り型の正解などなくなつたいま、その自分の軸をもつことが大事だと思っております。

未知の生き方にふれることは「多様性」の発見にもつながります。生き方って想像以上に自由で多様だ。そう実感したなら、誰かに敵わない面があつても、目指したことが実現しなくても、ほかに自分にできることがあるかもしれない、と粘り強く前を向けるのではないのでしょうか。自分とは異なる生き方をする人のことも、頭からは拒絶せず、なんとか受け止めて適度な距離感で関われそうです。

生き方の多様性を理解することは、自己を肯定し、他者を受け止め、おのおのが持ち味を発揮しながら共に暮らすための土台となるもの。それは、障害などで社会参加が十分でなかった人から異文化の人まで、さまざまな人と「共生する社会」を見すえて国が推進していること——障害のある子どもへの特別支援教育や、誰もが自分らしく学びを深めるインクルーシブ教育の方向性とも重なります。

先生のやりたいことは？

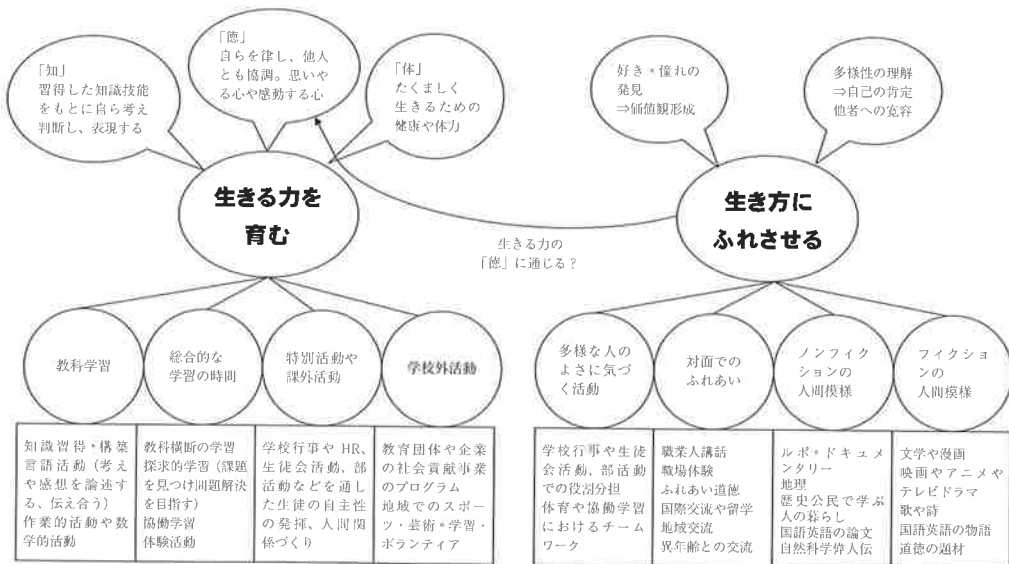
ここまでの話を具体的な手法も含めてまとめると、私のキャリア教育のイメージは下図のようになります。そして大変個人的な思いも付け加えますと、私自身は、子どもたちを「生き方」にふれさせることにより興味があるかなあ、と感じています。

本や漫画や映画の登場人物、取材や日常で出会った人、そうしたものが私に授けてくれた「不完全なところもあるけれど、人間って面白い」という感覚を、子どもと分かち合いたい。それが私の大きな欲求の一つだからだと思います。

一方で、先生方には、その思いに共感してくださる方もいれば、子どもたちが「生きる力」をつけて成長していく姿を目の当たりにしたときにこそ、最大の喜びを感じる方もたくさんいらっしゃるのでは、と想像しているのですが、いかがでしょうか？



キャリア教育の全体イメージ※



※このイメージは筆者の一案であり、ほかにもさまざまなキャリア教育の見方があると考えています。その点を学校内外のみなさんとどんどん議論して話を深めていくことに、これからの教育の可能性を感じています。